

アルミニウスとウェスレーの恵みの教理

久保光彦

1618年の11月13日から1619年の5月29日にかけて、オランダのドルトレヒトでオランダ改革派の「ドルトレヒト全国総会議」¹が開催された。それから数えて今年（2018年）は400年の節目の年である。

この総会議において成立した文書が「ドルトレヒト信仰基準」である。この信仰基準は、ライデン大学神学教授であったヤコブス・アルミニウス（1559-1609）²の弟子たち（レモンストラント派）が会議に先立って提出した「レモンストラント五条項」³をはじめとするその神学を、異端として排

¹ ドルトレヒト全国総会議、また「レモンストラント五条項」などの歴史的背景については、改革派側の視点の邦書として、牧田吉和『ドルトレヒト信仰基準研究』一麦出版社、2012年、15-58を参照のこと。なお、本論中の固有名詞は基本的に『ドルトレヒト信仰基準研究』のそれを踏襲している。このオランダ改革派の会議においては、多くのことが討議されている。例えば、オランダ語聖書の問題や、異教徒の子どもたちの洗礼の問題、また牧師候補者の準備教育の問題などの、様々な分野の問題などについてである。

² アルミニウスの生年について、1560年とするものが多いが、2012年に上梓されたStanglin / McCallによる*Jacob Arminius: Theologian of Grace*では1559年とされており、筆者も1559年とする。GunterもBangsを引用し、1559年の可能性について言及している。Gunter, 12.

³ 牧田が指摘するように、“Remonstrantie”「抗議書」の意。（牧田、22）アルミニウスの神学に対する嫌疑に対する「抗議書」を提出したことで、アルミニウスの後継者たちは「レモンストラント派」と呼ばれるようになる。紙幅の関係で言及できないが、ドルトレヒト全国教会会議は宗教と政治が入り混じった非

除するものであった。

この「ドルトレヒト信仰基準」については、「その教理内容は『チューリップ』(TULIP) というスローガンで記憶され、「カルヴィニズムの五特質」としてよく知られている」⁴。ウェスレー神学の流れをくむ者たちにもこの「カルヴィニズムの五特質」は周知されていると言えるが、この「五特質」のもととなっている「ドルトレヒト信仰基準」が、そもそもはアルミニウスの神学を踏襲する者たちによって起草された文書ならびにその神学への反駁として記されたことについてはあまり認知されていないと言える。

なぜ「ドルトレヒト信仰基準」が「レモンストラント五条項」などのアルミニウスの立場を踏襲する神学を異端として排除したことに重要な意味があるかと言えば、後述するように、アルミニウスの神学とウェスレーの神学には少なからず通底する部分があるからである。それゆえに、ドルトレヒト公会議がアルミニウスの神学を異端として排除したという歴史的事実は、ウェスレー神学を踏襲する者たちにとっても、大きな意味を持つ。

1. 「レモンストラント五条項」(1610)⁵の恵みの教理

「レモンストラント五条項」はその表題が示す通り五箇条の条文である。この文書の中で言及されている教理の分野は実に幅広い⁶。予定論に始まり、

常に複雑な背景を持つ。詳しくは、牧田、また、藤本満『歴史 わたしたちは今どこに立つのか』148-151、桜田美津夫『物語 オランダの歴史』63-70などを参照。

⁴ 牧田、13

⁵ レモンストラント五条項の背景については、牧田 22 を参照

⁶ Foster はレモンストラント五条項をこうまとめる。“(1) double predestination was conditioned on faith; (2) Christ died for all, but no one enjoys forgiveness but the believer; (3) fallen man is powerless to accomplish anything truly good until he is born again and his will renewed; (4) all good is dependent upon the grace of God, but this grace is not irresistible; (5) grace is adequate, but it was not yet clear whether true believers can lose that grace.”(Foster 18-19)

贖罪論、恩寵論など、様々な教理が取り扱われているが、本稿においては「レモンストラント五条項」において示されている恵みの教理に関する部分を中心に考察し、またその恵みの教理に対してなされた批判についても検討する。そして最後にウェスレーの恵みの教理との関連についても短く考察したい。

さて、「レモンストラント五条項」において恵みの教理が取り扱われていると考えられる条文は、第三条と第四条である。まず、以下に全文を示す。

第三条

人間は、救いの信仰を自分自身によっても自分の自由意志の力によっても持てないのである。なぜなら、人間は背信と罪の状態であって真に善であるような(特に救いの信仰のような)善きことは何も自分自身からまた自分自身によって考えることも、意思することも、なすこともできないからである。むしろ、人間が真に善きことを正しく理解し、考え、意思し、なすことができるためには、人間は、神によってキリストにおいて聖霊をとおして再生され、理性と感情と意思とあらゆる力において新たにされる必要がある。これは「わたしから離れては、あなたがたは何もできないからである」というヨハネによる福音書 15 章 5 節のキリストの言葉にあるとおりである。

第四条

この神の恵みは、あらゆる善の発端であり、継続であり、完成である。再生された人間でさえ、この先行した助力し、覚醒し、随伴し、協働する恵みがなければ、善きことを考え、意思し、なすことも、悪へのいかなる誘惑に抵抗することもできないほどである。したがって、考えられうるすべての善き業も働きもキリストにある神の恵みに帰されねばならない。しかし、この恵みの働き方に関しては、それ

は不可抗的ではない。というのは、聖霊にさからった多くの人たちについて記されているからである。使徒言行録 7 章、その他多くの箇所であったところにあるとおりである⁷。(下線部筆者)

「レモンストラント五条項」はアルミニウス本人の筆によるものではないが、その内容はアルミニウスの神学が反映されたものである⁸。実際に、アルミニウスが 1608 年に州議会で行った演説⁹の恵みについての項目を見ると、アルミニウスはこう述べている。

I ascribed to grace the beginning, the continuance, and the consummation of all good. I would go so far to assert that the creature, although regenerated, can neither conceive, will, nor do any good at all, nor resist any evil temptation, apart from this preventing and awakening, this continuing and cooperating grace. [...] I believe that Scripture teaches that many persons resist the Holy Spirit and reject the grace offered.¹⁰

上に引用したアルミニウス自身の文章と、「レモンストラント五条項」の第四条の冒頭とを比較するとき、その類似性は明らかである。罪の中に墮落した人間に働きかける先行する神の恵みなしに¹¹、人は如何なる善の業を想起

⁷ 牧田、62

⁸ McCall and Stanglin, 190. “These points [of the Remonstrance] are consistent with the views of Arminius; indeed, some come verbatim from his *Declaration of Sentiments*.”

⁹ この演説が *Declaration of Sentiments* である。

¹⁰ Gunter, 140

¹¹ Olson は “A Letter To Hippolytus A Collibus” の中でアルミニウスが恵みについて論じている部分を踏まえて、“The grace Arminius described in that rather lengthy statement is prevenient grace” と指摘する。この手紙において、アルミニウスは “That I may not be said, like Pelagius, to practise delusion with regard to the word “Grace,” I mean by it that which is the Grace of Christ and which belongs to regeneration: I affirm, therefore, that this grace is simply and absolutely necessary for the illumination of the mind, the due ordering of the affections, and the inclination of the will to that which is good: It is this grace which operates on the mind, the

することも実践することもできない。しかし、この恵みは、不可抗ではない、というのがアルミニウス、そしてドルトレヒト教会会議におけるレモンストラント派の神学¹²における基本姿勢である。

affections, and the will; which infuses good thoughts into the mind, inspires good desires into the affections, and bends the will to carry into execution good thoughts and good desires. This grace [pravenit] goes before, accompanies, and follows; it excites, assists, operates that we will, and cooperates lest we will in vain. It averts temptations, assists and grants succour in the midst of temptations, sustains man against the flesh, the world, and Satan, and in this great contest grants to man the enjoyment of the victory. It raises up again those who are conquered and have fallen, establishes and supplies them with new strength, and renders them more cautious. This grace commences salvation, promotes it, and perfects and consummates it.” (*Works of James Arminius, D.D.* Volume II, Trans. James Nichols, London: Longman, 1828. 下線筆者) と述べている。

¹² Hicks は、アルミニウスといわば第三世代のレモンストラント派といえるリンボルヒュ (1633-1712) の神学を比較した論文の中で “It is true that Limborch and Arminius share a synergistic view of the reception of grace. However, this similarity is more apparent than real. Synergism has a different character in Arminius than it does in Limborch. The Remonstrant theologian regards the action of the free will as meritorious in some inferior sense. The reason it can be regarded as such is that this free action arises from the natural ability of man to will and do the good. The assistance of the Spirit is restricted to the arguments, threats and promises of the Gospel. Man, by his own right use of revelation according to the principles of his reason, is able to believe without any internal or personal work of the Spirit. Since faith is something that arises from man's own free act, and it is an obedient act, it contains within itself a merit that cooperates with the merit God has provided in the work of Christ (which in this case is simply the relaxation of the Law). It cooperates by not only yielding assent, but earning its own merit. For Arminius, the notion that the free act of the will is meritorious or simply arises from within man himself is anathema. The freedom of the will to actually move itself toward the good is the result of the regenerative work of the Spirit. Faith is not merit, but the reception of merit. Thus, while Arminius and Limborch agree that the will cannot be forced to accept grace, they disagree on the nature and origin of the free acceptance of that grace. Their only fundamental point of agreement is that the natural freedom of man cannot be overruled without serious

さて、アルミニウスの神学に対して、「ドルトレヒト信仰基準」では恵み（聖霊の働き）についてこのような記述がある。

・・・しかし、神はまた、同じ再生の御霊の有効な働きによって人間の内面の最深部にまで入り込み、閉じられた心を開き、かたくなな心をやわらげ、無割礼の心に割礼を施されるのである。神は、意思の中に新しい性質を注ぎ込み、死んでいた意思を生き返らせ、邪悪な意思を良いものに、欲しない意思を欲するものに、強情であった意思を従順なものにされる。良い木のように、良い行いの実を結ぶことができるために、意思を動かし強められるのである¹³。

この箇所について牧田は「聖霊は、御言葉と共に、選ばれた者において働き、回心をもたらす、この聖霊の恵みは不可抗的である」(下線筆者)¹⁴と指摘する。「ドルトレヒト信仰基準」に示されている改革派の神学の予定論は、救いと遺棄の二重予定である。「選ばれた者」とあるのは、「ドルトレヒト信仰基準」においては、救いの恵みが注がれているのは「ある定まった人たち」¹⁵だからである。「ドルトレヒト信仰基準」の神学によれば、「ある人たちは選ばれず、神の永遠の選びにおいて見過ごされ」¹⁶ている。救いに導く恵みはすべての人に注がれているわけではない。

injustice to the nature of man as man. It is this premise which forces both systems to recognize the resistibility of grace.”(Hicks 147, 下線は筆者) と指摘しており、アルミニウスと後世のレモンストラント派は必ずしも同じ神学的姿勢をとっていないことを指摘している。しかし、少なくとも、ドルトレヒト教会会議で異端とされた世代(シモン・エピスコピウスなど)は、少なくとも「レモンストラント五箇条」や「レモンストラント見解書」などを見る限りでは、恩恵論に関しては、アルミニウスの神学を踏襲しているものであるといえる。

¹³ 牧田、111-112 (「ドルトレヒト信仰基準」第三・四教理条項 第十一条)

¹⁴ 牧田、150

¹⁵ 牧田、89

¹⁶ 牧田、92

しかし「レモンストラント五条項」が主張したのは、救いの恵みはすべての人に注がれているが、その恵みは可抗的である、ということであった¹⁷。このように、恵みについての正反対の理解を、ドルトレヒト教会会議における二つの神学的立場に見出すことができる。明らかに、アルミニウスたちの恵みの神学は改革派のそれと相容れなかった¹⁸。そしてアルミニウスの神学は異端として排斥された。そして、短い期間ではあったが、レモンストラント派の牧師たちは国外退去の処分を受ける。

触れておくべきこととして、アルミニウス（とその後継者たち）の恵みの神学について「セミペラギウス主義が指摘される」¹⁹ということがある。アルミニウスたちの神学が異端ではないかと糾弾された理由の一つはここにある。

McCall はセミペラギウス主義の本質について、“the beginning of our salvation is (or may be) from us not God²⁰”であるとする。また、Olson は

Cassian and the other Massilians taught that a human being can only be saved by God through grace, but that such salvation could begin with the initiative of a good will toward God in the human heart. Their view of the beginning

¹⁷ 「世の救い主イエス・キリストは、すべての人のためにそしてどの人のためにも死んだのである。その結果、彼は十字架の死によってすべての人のために罪の贖いと赦しとを獲得したのである。」（「レモンストラント五条項」第二項）牧田 61 “He [Arminius] argues that Scripture teaches quite clearly that Christ paid the ransom (*λύτρον*) for the sins of the whole world (Jn. 1:29; 6:51; Rom. 14:15; 2 Cor. 5:19-21; 1 Tim. 4:20; Heb. 2:9; 2 Peter 2:1; 1 Jn. 2:2; 4:14)” Stanglin / McCall 124.

¹⁸ 後年、Wesley も “What is an Arminian?”の中で “The Arminians hold, God has decreed from all eternity, touching all that have the Written word, “He that believeth shall be saved: he that believeth not, shall be condemned:” and in order to this, Christ died for all, all that were dead in trespasses and sins that is for every child of Adam, since in Adam all died.” (Wesley, *The Works of Rev. John Wesley*, Vol XV, Ed. Joseph Benson, London: Thomas Cordueux, 1812. 27 下線筆者)と述べている。

¹⁹ 牧田、151

²⁰ McCall, 300

of salvation can be summed up by the expression “God helps those who help themselves” or at least by the saying “If you will take one step toward God, he will come the rest of the way to you.”²¹

と述べている。また Olson は Gibson を引いて、セミペラギウス主義においては “that [human] nature, unaided, could take the first step towards recovery, by desiring to be healed through faith in Christ.²² ” (下線筆者) と捉えられていることを示している。恵みの助力なしに、救いを望み、救いを求めて一步を踏み出す力が墮落後の人間にも残っているとするのがセミペラギウス主義とすることができるだろう。

アルミニウスの恵みの神学について、それはセミペラギウス主義であるとの批判が存在することは事実である。しかし、アルミニウスや「レモンストラント五条項」に見られる恵みの神学のテキストと、上述のセミペラギウス主義を比較するなら、アルミニウスたちがセミペラギウス主義に陥っているという指摘は不正確であるとしか言えない。なぜなら、「この神の恵みは、あらゆる善の発端であり、継続であり、完成である。再生された人間でさえ、この先行した助力し、覚醒し、随伴し、協働する恵みがなければ、善きことを考え、意思し、なすことも、悪へのいかなる誘惑に抵抗することもできないほどである」と五条項に記されている通りである。アルミニウスにとって、罪の中に墮落している²³人間にとって、この（先行する）恵みなしに救いはあり得ない。それゆえに、アルミニウスの神学はセミペラギウス主義ではない。

²¹ Olson, 282

²² Gibson quoted in Olson.

²³ “Although Arminius never uses the phrase total depravity, nevertheless he teaches precisely what later Reformed writers mean when they use this phrase: the damage is ‘total’ in the senses that no aspect of human nature—especially the intellect, will and affections—remains unaffected and that no one is able to merit salvation.” (Stanglin / McCall 150)

II. ウェスレーの恵みの神学

アルミニウスの（恵みの）神学は、ジョン・ウェスレーの神学にも受け継がれている。ウェスレーが刊行した雑誌が、*Arminian Magazine* という名を冠していたことから、アルミニウスがウェスレーに少なからぬ影響を与えていたことは明白である²⁴。

先行する恵みについて、Outler は “On Working Out Our Own Salvation” の III の 3 と 4 に、ウェスレーのこの教理に関しての精髓が表れていることを指摘する²⁵。

3. First, God worketh in you; therefore you can work: Otherwise it would be impossible. If he did not work it would be impossible for you to work out your own salvation. "With man this is impossible," saith our Lord, "for a rich man to enter into the kingdom of heaven." Yea, it is impossible for any man, for any that is born of a woman, unless God work in him. Seeing all men are by nature not only sick, but "dead in trespasses and sins," it is not possible for them to do anything well till God raises them from the dead. It was impossible for Lazarus to come forth, till the Lord had given him life. And it is equally impossible for us to come out of our sins, yea, or to make the least motion toward it, till He who hath all power in heaven and earth calls our dead souls into life.

4. Yet this is no excuse for those who continue in sin, and lay the blame upon their Maker, by saying, "It is God only that must quicken us; for we cannot quicken our own souls." For allowing that all the souls of men are dead in sin by nature, this excuses none, seeing there is no man that is in a state of mere nature; there is no man, unless he has quenched the Spirit, that is wholly void of the grace of God. No man living is entirely destitute of what is

²⁴ Stanglin / McCall は “Another type of Arminianism without direct links to Arminius himself is the Methodism of John and Charles Wesley.” (193) とする。同じページの n.15 も参照。

²⁵ BE Works, ii, 156-157

vulgarly called natural conscience. But this is not natural: It is more properly termed preventing grace. Every man has a greater or less measure of this, which waiteth not for the call of man. Every one has, sooner or later, good desires; although the generality of men stifle them before they can strike deep root, or produce any considerable fruit. Everyone has some measure of that light, some faint glimmering ray, which, sooner or later, more or less, enlightens every man that cometh into the world. And every one, unless he be one of the small number whose conscience is seared as with a hot iron, feels more or less uneasy when he acts contrary to the light of his own conscience. So that no man sins because he has not grace, but because he does not use the grace which he hath.²⁶ (下線部筆者)

この引用を見るならば、先行的恵みに関してのウェスレーの立ち位置はアルミニウスたちの流れを汲むものだと言えらう²⁷。恵みを通して「神が働かれるから」人は救いの呼びかけに応答できる。すべては神から始まる。そして、救いへと導く神の恵みはすべての人に注がれている²⁸。しかし、注

²⁶ <http://wesley.nnu.edu/john-wesley/the-sermons-of-john-wesley-1872-edition/sermon-85-on-working-out-our-own-salvation/>

²⁷ Collins は Outler の指摘(*BE Works*, ii, 156-157)を参照しつつ、アルミニウスがセミペラギウ斯的な立場(“Arminius held that man hath a will to turn to God *before* grace prevents him”)を取っているように解釈している(79)。Outler の引用している文書は Fletcher の著作の中に見ることができる。Fletcher は“*But if Arminius, (as the author of Pietas Oxoniensis affirms, in his letter to Dr. Adams,) ‘denied, that man's nature is totally corrupt; and asserted, that he hath still a freedom of will to turn to God, but not without the assistance of grace,’ Mr. Wesley is no Arminian; for he strongly asserts the total fall of man, and constantly maintains that by nature man's will is only free to evil, and that Divine grace must first prevent, and then continually farther him, to make him willing and able to turn to God*” (Fletcher, 16) Fletcher はウェスレーたちの論敵であった Richard Hill の手紙を引用しつつ論じているが、ここで必ずしも Arminius がそう書いていると断定しているわけではない。「もしアルミニウスがこう書いているなら、ウェスレーはアルミニアンではない」ということである。実際、McGonigle は Hill の手紙における Arminius の引用がそもそも不正確であることを指摘し、ウェスレーやフレッチャーの自由意志についての教理はアルミニウスの流れを汲むと指摘している。(McGonigle 290-291)

²⁸ 藤本『ウェスレー』、160-163、Collins 73-82。Collins は先行的恵みによって器

がれている恵みを用いるかどうかは、本人の意思にゆだねられている。

結びとして

Oden は *Arminian Magazine* がウェスレーとカルヴァン主義者の論争の中で刊行されたことを指摘しつつ、“By Arminianism he [Wesley] referred to a moderated Calvinism, tempered in the direction of synergism, over against absolute double predestination. Meanwhile, Wesley’s theology retained most other standard features of Reformed exegesis excepting its hyper Augustinian elements.”²⁹ (Oden 256)とする。筆者は、この神学的形容はアルミニウスにも当てはまると考える。アルミニウスならびにウェスレーの神学は、宗教改革の神学の骨子は踏襲しつつも、アウグスティヌスの極端な教理を退け³⁰、より聖書的でバランスの取れた神学が志向されているといえる。

本論においては、駆け足ながら、ドルトレヒト全国教会会議 400 年を契機として「レモンストラント 5 条項」などの歴史文書、そしてアルミニウスの神学、又その神学的系譜を踏襲するウェスレーの神学を再考した。この営為を通して、恵みの神学の理解において「私たちがどこに立つか」ということを今一度再確認する機会となれば幸いである。

(インマヌエル和歌山教会牧師)

参考文献

官が回復されることと、回復された器官を通して神の召しを聞くことは分けてとらえており、召しに応答できる状態にまで器官を回復する先行的恵みについては「不可抗的」とであると指摘する (80)。

²⁹ Oden 256

³⁰ “It is true that some of his [Augustine’s] theses, notably his belief in the irresistibility of grace and his severe interpretation of predestination, was tacitly dropped” Kelly 371

- Arminius, James. *Works of James Arminius, D.D.* Volume II, Trans. James Nichols, London: Longman, 1828
- Collins, Kenneth J. *The Theology of John Wesley: Holy Love and the Shape of Grace.* Nashville: Abingdon, 2007.
- Fletcher, John. *The Works of the Reverend John Fletcher: Late Vicar of Madeley, Volume I.* New York: T. Mason and G. Lane, 1836.
- Foster, Herbert Darling. "Liberal Calvinism; The Remonstrants at the Synod of Dort in 1618" *The Harvard Theological Review*, Vol. 16, No. 1 (Jan., 1923), pp. 1-37
Cambridge: Cambridge University Press.
(<https://www.jstor.org/stable/1507804>)
- Gunter, W. Stephen. *Arminius and His Declaration of Sentiments: An Annotated Translation with Introduction and Theological Commentary.* Texas: Baylor University Press, 2012.
- Hicks, John Mark. "The Theology of Grace in the Thought of Jacobus Arminius and Phillip van Limborgh: A Study in the Development of Seventeenth-Century Dutch Arminianism" Ph.D. diss., Westminster Theological Seminary, 1985.
- Kelly, J.N.D. *Early Christian Doctrines Revised Edition.* New York: Harper One, 1978.
- McCall, Thomas H. *Against God and Nature: The Doctrine of Sin.* Wheaton: Crossway, 2019.
- McGonigle, Herbert Boyd. *Sufficient Saving Grace: John Wesley's Evangelical Arminianism.* Carlisle: Paternoster, 2001.
- Oden, Thomas C. *John Wesley's Scriptural Christianity: A Plain Exposition of His Teaching on Christian Doctrine.* Grand Rapids: Zondervan, 1994.
- Olson, Roger E. *The Story of Christian Theology: Twenty Centuries of Tradition and Reform.* Madison: IVP Academic, 1999.
- Stanglin, Keith D., and Thomas McCall. *Jacob Arminius: Theologian Of Grace.* Oxford: Oxford University Press, 2013.
- Wesley, John. *The Bicentennial Edition of the Works of John Wesley: Volume 2 Sermons 34-70.* Eds. Frank Baker and Albert C. Outler et al. Nashville: Abingdon, 1985.
- Wesley, John. *The Works of Rev. John Wesley, Vol XV,* Ed. Joseph Benson, London: Thomas Cordueux, 1812.
- 桜田美津夫『物語 オランダの歴史』東京：中央公論新社、2017年
- 藤本満『ウェスレーの神学』東京：福音文書刊行会、1990年。
『歴史 わたしたちは今どこに立つのか』東京：日本キリスト教団出版局、2017年。
- 牧田吉和『ドルトレヒト信仰基準研究』札幌：一麦出版社、2012年。